保育の場における発達支援

― 発達の遅れがみられる子どもの人間関係の形成に着目した事例検討を通して ―

永　田　恵実子・三　條　美　和・中　野　恵　子
静岡英和学院大学　大原保育園　六合第一保育園

Supporting Children with their Development in Day-care Centers；
Through Case Studies on Children with Developmental Delay and their Forming of Human relationships

Key Words：Nursery day-care center, Children with Developmental Delay, Human relationship, Case Study

要約

発達の遅れがみられる子どもは、人間関係に困難を抱えることが多い。そういった子どもとの保育者の関わりは、個々の子どもの発達にあったものでなければならない。A保育所での発達の遅れがみられる6人の子どもの支援について具体的な事例をもとにして、どのような活動内容、参加の形態・方法、保育者の働きかけ等によって、大人との関係や子どもたち同士の関係が発展し、そこから①安心感、②他者の受容・承認、③援助・自己調整、④自尊感情がどのように変化していくかについて検討した。その結果、日々の行事やあそびの中で、保育者が仲立ちとなることで、仲間の中で、安心感、他者の受容・承認を得ながら、仲間関係を養っていく様子がみられた。

子どもは、安心できる環境の中で、自己表出し、安心できる活動の中で、受け入れられる様々な経験を積みながら、仲間とつながる楽しさと自尊感情を味わっていった。仲間関係を深める支援として重要な点は、保育者が、子どもに他児の気持ちの理解をさせることであることがわかった。

Ⅰ　研究目的

子どもたちにとっては、保育の場は集団保育の場である。仲間をつくり、人間関係の広がりを味わい、さらに、関係の深まりも経験していく場でもある。しかし、発達の遅れがみられる子どもは、人間関係に困難を抱えることが多い。そのため、保育者の関わりは、個々の子どもの発達にあった個別の対応や、援助内容が重要になってくる。また、発達の遅れがある子どもの場合、子どもを集団に適応させるのではなく、周囲の友達・集団の変容に注目して関わりを考えていくことの重要性が指摘されている。[1)]

保育所保育指針では、乳幼児の人間関係について、「他の人々と親しみ、支えあって生活するために、自立心を育て、人と関わる力を養う」とある。ねらいとしては、①保育所の生活を楽しみ、

自分の力で行動することの充実感を味わう②身近な人と親しみ、関わりを深め、工夫したり、協力したりして一緒に活動する楽しさを味わい、愛情や信頼感をもつ。③社会生活における望ましい習慣や態度を身に着ける。[2]と記されている。保育実践は、他領域とも複雑に関連し合いながら行われている。日々の保育での子どもの人間関係の発展は、保育者の力量が必要となる。

山本ら（2014）人間関係は表面的なものと判断するものではなく、集団保育においての関係性が問題となると考えた。そのため、人間関係の密接に関連する指標項目をつくり、保育実践の継続的観察から、保育者のどのような活動内容、参加形態・方法、保育者の働きかけが大人との関係や子ども同士の関係が発展するのかを研究した。その結果、保育者の、子どもが見通しをもてる環境づくりと安心をもって取り組める援助が子どもの達成感や自信、自己調整につながることを述べた。さらに、一緒に支えてくれる人がいると、難しい課題も取り組もうとし、自己肯定感につながったと考察した。また、支えあう人間関係からの子どもの発達を示唆した。[3]

Ａ保育所でも、保育者が個々の子どもの人間関係を深める援助をしている。また、子どもを集団に適応させるのではなく、周囲の友達・集団の変容に注目した、実践の必要性も理解している。

本研究の目的は、Ａ保育所での発達の遅れがみられる子どもの支援について具体的な事例をもとにして、どのような活動内容、参加の形態・方法、保育者の働きかけ等によって、大人との関係や子どもたち同士の関係が発展し、そこから、①安心感、②他者の受容・承認、③援助・自己調整、④自尊感情がどのように変化していくかを検討することである。先行研究にはこれらに准じた事例分析にいくつかの先行研究があるが、それらの調査方法や分析等を学びながら進めた。

事例は限られているので、本結果をもって、直ちに、人間関係の発展を示すことはできないものの、それらを検討する際の実践的な示唆はできると考える。ここでの保育者の実践記録は公表のためではなく、あくまでも施設内での情報交換のためにメモ書き的に作成したものである。しかしながら、保育中の日常的な出来事のあるがままに載せているため、むしろ実践記録は貴重な原資料となる。したがって、それらを検討することに、とくに価値があると考えている。

Ⅱ　研究方法

本研究では、Ａ保育所の人間関係に遅れがみられる幼児６名（３歳児２名、４歳児３名、５歳児１名）を担当する保育者の実践記録から、友達との関係を中心にその変化を分析することにした。記録の分析にあたって、山本ら（2014）の研究「人間関係の密接に関連する指標」[3]を用い、①安心感（ⅰ身体的・生理的な安全感、ⅱ情緒的安定〈脅威や恐怖を感じない〉ⅲ自己表出〈自分の思いを緊張しないで表現できる〉ⅳ活動の見通しがもてる、ⅴ所属感がある〈自分を受け入れてくれる居場所がある・周囲から必要とされる〉）、②他者の受容・承認、③援助・自己調整、④自尊感情（ⅰ何かが達成できて自分が有能を感じる「自信」ⅱ必ずしも達成できなくても自分に価値があると思え、弱さをもった自分を肯定できる「自己肯定感」）とした。

主に関わる保育者が、特徴ある人間関係に関する事例を挙げるように依頼し内容について研究す

ることにした。子どもの変化を分析には下線―を、保育者の働きかけには～を記した。

Ⅲ　分析結果

倫理上の配慮として、本調査研究をまとめるに当たり、調査対象の保育所を匿名としたほか、各事例に登場する子どもや保護者の個人情報については、その保護のためにケースの本質を失わない範囲でつくり直してある。筆者の立場として、この保育所で保育者たちに14年間（2003～2017年現在）毎月１回程度、発達に遅れがある子どもの発達相談やコンサルテーションを行っている。それがゆえ、この記録を作成した保育者と保育所長からはこれらの条件のもとで事例を公表することの了承を得ている。

１子どもの事例

ここでは、2017年度の実践記録から、６人の子どもを担当する保育者たちが選んだ、それぞれの子どもの特徴ある人間関係に関する事例を挙げ考察していく。

（１）Ｂ児（男児）　３歳児（2013年10月生まれ）

１）子どもの実態

① 生育歴：父・母：30歳代（会社員）母親が主に育児。
乳児期：健康、栄養（母乳）、離乳開始（６か月）首が座る（４ヶ月）生歯（９か月）、はいはい（10か月）人見知り（８か月）歩行（１歳５か月）片言発語（２歳６か月）

② 食事：食は決まったものを食べる傾向（ご飯だけ食べる）。給食では、白米と果物以外は口にしない。食べ方（手づかみ、スプーン）・飲み方（コップ使用）椅子に座って食事する。

③ 排泄：紙おむつを使用、便通（毎日２回）

④ 睡眠：夜９時～朝６時30分まで　昼寝：12時半～14時、寝つき、寝起きは良い。添い寝。

⑤ 清潔：手洗いは促すとするときもある。

⑥ 着脱：ズボン・靴下・ファスナーが自分でできる。

⑦ 家庭での人とのかかわり：家庭では母・父とブロックや積み木で遊ぶ。

⑧ 運動：一人歩き・小走りができる。

⑨ 言葉：遅れがある。単語で保育者にして欲しいことを伝えることができる。語彙数は増えてきたが自分の思いを言葉で伝えるのはまだ難しい。

⑩ あそび：好きな玩具（ブロック、アンパンマン人形）を並べて遊ぶ。

⑪ 発達検査（遠城寺式・乳幼児分析的発達検査）実施日2017年10月20日
ⅰ暦年齢３：８　ⅱ移動運動２：９　ⅲ手の運動１：５　ⅳ基本的生活習慣１：０
ⅴ対人関係０：10　ⅵ発語２：６　ⅶ言語理解１：２

⑫ 対人関係、社会性、コミュニケーション：思いが通らないと激しく泣いて怒り、保育者や

近くの友達に対して手を出してしまうことがある。他児が楽しそうに笑っていたり集まっていたりすると覗きに行ったり一緒に並んでみたりと少しずつ周りに対して興味が出はじめた。

⑬　その他：乳児相談経過観察中、療育施設に週１回通所、作業療法月２回通所している。保育所での活動に興味がわかないと「いらない」「やらない」と言い切り換えが難しい。玩具を出して遊ぶが片づけは苦手である。1歳児から保育所に入所。

２）Ｂ児のエピソード（11月６日）〈他児に興味を示し、自分から関わりにいくようになってきた〉

保育所の避難訓練の日。避難所が近くのお寺がであった。Ｂ児は外で遊びたかったこともあり、機嫌を悪くしていた。保育者に促され、仕方なくお寺に向かって歩く。歩きながらも、時々「あっち行く」と苛立つ様子をみせていた。すると、突然、前を歩いていたＨちゃんの靴が脱げた。それを見たＢ児は、「Ｈちゃん大丈夫～」と言い、近寄った。Ｈ児が靴をはいて急いで散歩の列に戻った。それを見たＢ 児は、「まて～」と嬉しそうにＨ児を追いかけた。追いかけることを楽しんでいる様子であった。

気分を悪くするとなかなか気持ちが切り替えられないＢ児であったが、周りの子どもに何か変化があると、その行動が気になり、確かめにいく姿がみられるようになった。今までは気にせずにいた周りの子どものあそびにも興味を示し、覗きに行っている。

午後、Ｋ児が保育者から注意を受け泣いていた。Ｂ児はその様子をみると、保育者に向かってわざと「キャー」と奇声をあげ、叩いたり、物を投げたりした。自分が叱られているように捉えたのか、他児が保育者いじめられていると思ったのかわからないが、Ｋ児の叱られる状態を止めたい行為であった。

Ｂ児に対しての他児たちの変化もみられた、あそびの中でＢ児にブロックを手渡し、Ｂ児が「ありがとう」と答えるのを期待してやり取りをしている。Ｂ児も他児も、ブロックを通して関係が続くことを楽しんでいるようである。両者が意識し始めている様子から、保育者は、子どもたちの関わりを深めていきたいと考え、仲立ちとなりながら関わりを増やすように意識した。

３）考察

Ｂ児は、これまで、周りの子どもの様子にあまり興味を示していなかった。しかし、避難所まで歩いている途中のＨ児の靴が気になり、「大丈夫」と声をかけた。また、保育者に叱られて泣いてつらい思いをしているＫ児の気持ちが自分の気持ちと重なり、その場で保育者の行動を止めようとした。今までは、保育者との関わりが主であったが、ここでは、子どもとの関係にも広がった様子が見て取れた。Ｂ児は、Ｈ児やＫ児との関係には「安心感」がもてるようになっていた。したがって、「自己表出」がみられるようになった。

また、友達が渡してくれるブロックに「ありがとう」と応え、友達もそのやり取りを楽しむ姿は、子どもたちの中での「他者の受容・承認」と考えられた。しかし、Ｂ児は、まだ自己コントロールの力が弱く、気持ちが移りやすいため、関わりは長くは続かない。この時期のＢ児に対して、保育者は、①安心できる子どもが自己表出できる環境、②周りの子どもたちがＢ児に興味をもってきて

いること、の両者の発達を加味して、簡単な方法でのＢ児と他児の関わりの糸口をみつけることが必要であることを理解し始めた。小さな出来事の中にも保育者の仲立ちとなる役割が大切であるといえる。

（２）Ｃ児（男児）　３歳児（2013年11月生まれ）

１）子どもの実態

① 生育歴：父：40代、母：30歳代（会社員）兄（12歳）母親が主に育児。
乳児期：健康、栄養（混合）、離乳開始（６か月）首が座る（３ヶ月）生歯（５か月）はいはい（９か月）人見知り（７か月）歩行（11か月）片言発語（２歳２か月）

② 食事：食にあまり興味がない。食べる量が少ない。嫌いなものは口にしない。食べ方（スプーンを使用）、椅子に座って食事する。給食ではご飯とデザートのみを食べるが、ご飯にはふりかけ２種のうちどちらかを選びふりかけて食べる。

③ 排泄：紙おむつを使用。

④ 睡眠：夜９時30分〜朝７時30分まで　昼寝：しない。寝つき、寝起きは良い。一人寝。

⑤ 清潔：鼻が出たら自分で拭こうとする。

⑥ 着脱：パンツ・ズボン・靴下・帽子を自分で脱ぐことができる。

⑦ 家庭での人とのかかわり：母・父、兄。

⑧ 運動：一人歩き・小走り。自分の興味の持てる体操やリズム遊びには参加しようとする。

⑨ 言葉：簡単な会話ができる。「がんばれ」を「ばんがれ」、「カメムシ」を「マメムシ」と言う。

⑩ あそび：好きな玩具（人形・積み木・ブロック）。ルールのあるあそびに参加するがルールが理解できず、思い通りにならないと激しく泣く。

⑪ 発達検査（遠城寺式・乳幼児分析的発達検査）実施日2017年10月20日
ⅰ暦年齢４：０　ⅱ移動運動２：６　ⅲ手の運動２：３　ⅳ基本的生活習慣０：11
ⅴ対人関係１：６　ⅵ発語０：11　ⅶ言語理解０：11

⑫ 保育所での対人関係、社会性、コミュニケーション：友達との関わりは増えてきたが、力の加減が分からないためか、戦いごっこで本当に叩いたり、蹴ったりする。近づきすぎて、上に乗ったり、押したりしてしまう。運動会を通して他児に対して少しずつ興味が強くなってきた。

⑬ その他：乳幼児発達相談経過観察中、療育センターに週１回通所。

２）Ｃ児のエピソード（10月18日）〈自分の思いがあって、保育者の提案を受け入れられない〉

クラスで近くの神社へ散歩に行く。そのため、保育士は、子どもたちに子ども同士２人組になり手をつなぐように話した。Ｃ児は、「Ｉちゃん。」と言い、Ｉちゃんを探して手をつなごうとした。ところが、Ｉ児はすでに他児と手をつないでいた。クラスの人数が偶数なため、誰か１人保育者とで手をつなぐことになる。Ｃ児は保育者とつなぐことになった。しかし、その手を拒んだ。その時、

保育者は、C児に、「I児とそのペアのL児と、3人でつないだらどうかな」と提案した。しかし、C児は2人でつなぎたくて我慢できずに泣いてしまった。泣き出すと思いが通るまで泣き続け、歩道に座り込んでしまった。他の子どもたちが散歩中に危険がないようにするため、先に歩かせることになった。結局、C児は保育者と手をつないで歩くことになった。

保育者は、C児は、「こうしたい」という思いが強いが、思いの全てがみんなに受け入れてもらうことは難しいと言葉で伝えた。そして、我慢することも少しずつ覚えていってほしいと願った。

3）考察

C児は、「Iちゃんと手をつなぎたい」という気持ちを言葉（自己表出）で表した。Iちゃんという特定の友達の名前をあげたことから、「安心感」をもてた好きな友達ができていることがわかった。しかし、散歩に行くための、手つなぎルール（①並んだ順番に手をつなぐ、②偶数のため、1人は保育者と手をつなぐ）はまだ理解できていない。活動の見通しがもてないこともあり、保育者の提案、「3人でつないだらどうかな」が納得できなかったと考えられた。C児に活動の見通しがもてる関わりが必要であった。

保育者は、他児たちにC児の思いが全て受け入れられないことをことばで伝えているが、C児は、「他者の受容・承認」や「援助・自己調整」の発達段階まで達していないように見て取れた。したがって、この段階では、理解をすることは難しいと考えられた。保育者の願いは少し先走りと捉えられた。

（3）D児（男児）　4歳児（2012年6月生まれ）

1）子どもの実態

① 生育歴：父40代・母：30歳代（共に会社員）、姉（13歳）、兄（11歳）母親が主に育児。
乳児期：健康、栄養（母乳）、離乳開始（6か月）首が座る（3ヶ月）生歯（8か月）
はいはい（8か月）人見知り（7か月）歩行（1歳5か月）片言発語（12か月）

② 食事：小食。ご飯とデザートは食べられる。人に食べさせてもらうこともある。食べ方（スプーン、箸を使おうとするときもある）。

③ 排泄：紙おむつを使用。タイミングがあえば排泄ができることもある。便秘しがち。

④ 睡眠：夜10時〜朝7時まで　寝つきは悪い・寝起きは良い。添い寝。

⑤ 清潔：手洗い時気が散りやすく途中でやめることもある。介助があれば一人でできることもある。

⑥ 着脱：ズボンを脱ぐ時、周りに気が散りやすい。保育者が寄り添うことでできるときもある。

⑦ 家庭での人とのかかわり：①家庭では、母・祖父母・兄・姉。

⑧ 運動：一人歩き・小走り。歩くときにフラフラとする。座位を保つことが難しく体力がない。

⑨ 言葉：簡単な会話ができる。話す順番を守ったり、人の話を聞いたりすることは苦手であ

る。

⑩　あそび：好きな玩具（積み木・ブロック・ぬいぐるみ）。　あそびを静止されたり、興味のない活動へ誘われたりすると「いやだ」と部屋を出ていくことが多い。はさみをうまく使えないが、自分でやりたいという気持ちは強くもっている。

⑪　発達検査（遠城寺式・乳幼児分析的発達検査）実施日2017年10月20日

ⅰ暦年齢５：４　ⅱ移動運動３：４　ⅲ手の運動２：３　ⅳ基本的生活習慣２：３

ⅴ対人関係１：６　ⅵ発語１：９　ⅶ言語理解２：６

⑫　保育所での対人関係、社会性、コミュニケーション：活動の切り替えが難しく、自分のタイミングと合わないときはあそびが終われず、クラスの活動に参加することが少ない。

⑬　その他：ものを片づける際どこに置いていいかわからない様子。全体への指示は理解できない。見て興味をもつものは取り組む姿から視覚優位とみられる。

２）Ｄ児のエピソード（10月16日）〈楽しいはずの関わりに友達がなぜ怒るのかわからない〉

保育室にて身体測定を行う日であった。Ｄ児は、自分測定の順番がくるまで、マット（子どもたちが順番が来るのを待つ場所）の上で友達と一緒に待っていた。みんなと一緒にということが嬉しくて、Ｄ児は周りの友達の体にタッチをしたり、体ごと親しみを込めて、『ぶつかりっこ』したりしていた。すると、その行動をみていた子どもたちに、「Ｄくん、そんなことしたらいけないよ」と注意されてしまい、Ｄ児は大声で泣きだした。

保育者がＤ児に泣いている理由を聞くと、「みんなと遊んでいただけなのに、怒られてしまった。なぜ怒るの。」と言った。そこで保育者は、子どもの「くやしい」思いを受け止めつつ、Ｄ児に問いかけてみた。「みんなはタッチされてうれしいかな。ぶつかりっこした時、みんなは、楽しそうにしていたかな。」それは、他の友達の思いを代弁したことでもあった。そうして、ゆっくり子どもの気持ちの変化するのを待つことで、泣いていたＤ児は落ち着きを取り戻した。普段から周囲の友達と遊ぶことが少なく、まだ一人あそびや保育者と少人数でのあそびが多い。Ｄ児は、たくさんの友達と触れ合う中で、周りの子の声や思いを少し感じることができたと思った。

３）考察

Ｄ児は、「安心感」のある場所と友達の中で、「みんなと一緒でうれしい」という気持ちをもって、他児の体にタッチをしたり、体ごと親しみを込めたりして、『ぶつかりっこ』して「他者の受容・承認」を求めた。Ｄ児は、自分がうれしくてはしゃいでいた。ところが、その行為が、静かにマットの上で待っていた他児たちには受け入れられないものであったのだろう。楽しいあそびの最中に注意されてしまった。Ｄ児はみんなが楽しんでいると思っていたので、想定外のことばだったに違いない。「くやしい思い」をもって泣けてしまった。この場で「他者の受容・承認」が必要であったことが、Ｄ児には理解できなかった。

そこで、保育者は、時間をかけ、子どもの気持ちが落ち着くのを待った。高まる気持ちをクールダウンさせることが、Ｄ児にとって大変重要となった。Ｄ児は、これからの他児たちとの関わりの中から、他児がどんな思いでこの場にいるか、Ｄ児がしたいことは他児に受け入れられる行動なの

かなど、様々に他者の気持ちを理解できるようになることで、仲間の中で受け入れられていくのではないかと考えられた。

（4）E児（男児）　4歳児（2013.2月生まれ）

1）子どもの実態

① 生育歴：父30歳代（会社員）・母：20歳代。兄6歳。母親が主に育児。
乳児期：健康、栄養（母乳）、離乳開始（6か月）首が座る（4ヶ月）生歯（8か月）
はいはい（9か月）人見知り（12か月）歩行（1歳）。

② 食事：箸を使おうとするときもあるがうまく使うことは困難。スプーンやフォークを併用。

③ 排泄：促されれば排尿できる。

④ 睡眠：夜8時30分〜朝7時まで　寝つきは悪い・寝起きは良い。添い寝。

⑤ 清潔：手洗いは促すと洗うときもある。物の整理や管理が苦手で持ち物が分からなくなり、出しっぱなしになったりしていることがある。

⑥ 着脱：パンツ・ズボン・靴下・帽子を自分で着ることができる。

⑦ 家庭での人とのかかわり：母・祖父母・兄。

⑧ 運動：一人で遊ぶことが多い。他児のあそびの中に参加することはあまりない。

⑨ 言葉：語順が入れ替わってしまう。言葉の表現が苦手で「あれ」「あの」などの表現を多く使う。

⑩ あそび：好きなあそび（歌あそび・積み木・ボール投げ）。ブロックなどで好きなものを表現することは得意だが、絵で表現することが苦手で、思っているように書けないと納得できず怒れて泣いてしまうことがある。

⑪ 発達検査（遠城寺式・乳幼児分析的発達検査）実施日2017年10月20日
ⅰ暦年齢5：10　ⅱ移動運動3：4　ⅲ手の運動3：0　ⅳ基本的生活習慣2：3
対人関係0：10　発語2：0　ⅶ言語理解2：0

⑫ 保育所での対人関係、社会性、コミュニケーション：「一回だけ」「○○だけ」と参加する部分のゴールを示していくと全体の活動に参加できることがある。思い通りにならないときは、泣いたり、怒ったり、部屋を出て行くことがある。

⑬ その他：1日のスケジュールや、やり方を絵カードで一緒に確認していくと、それを見たり保育者に聞いたりしながらやってみようとする姿がみられる。

2）E児のエピソード（11月8日）〈勝ち負けに捕らわれない役割になるとあそびが楽しい〉

保育室にて、クラスの友達と保育者が『どんぐりじゃんけんゲーム（ルール：勝った子どもがどんぐりをもらえる。勝つとどんぐりの数が増え、一番多い子どもが勝ち）』をしていていると、「僕もやりたい」とE児が入ってきた。今までは、E児は「人に負ける」ということが嫌いで、じゃんけんあそびで負けたり、他のゲームで負けそうになったりすると、その時点でゲームをやめて部屋を出て行ってしまう。『どんぐりじゃんけんゲーム』に取り組んできたが、「どうせ負けるからやら

ない」と、あそびに参加しようとしなかった。

保育者は、勝ち負けに関係ない役割をＥ児にさせたらどうかと考え、「じゃあ、勝った方にどんぐりを渡す（勝った子どもにどんぐりを渡す係り）のをお願いしていいかな」と聞いた。すると、「いいよ」と快諾した。遊び始めると、Ｅ児は子どもたちのじゃんけんの勝負を見て「Ｊくんの勝ちでーす」と、楽しそうにどんぐりを手渡した。簡単なるルールも理解でき、その後も楽しく遊んでいた。

３）考察

Ｅ児は「人に負ける」ということが嫌いで、じゃんけんあそびで負けたり、他のゲームで負けそうになったりすると、その時点でゲームをやめて、部屋を出て行ってしまう。『どんぐりじゃんけんゲーム』も今まで取り組んできたが、今までは、「どうせ負けるからやらない」と、あまりあそびに参加しようとしなかった。Ｅ児はこのゲームに、「安心感」が得られていない。ルールのあるあそびの「勝ち負け」にこだわり、負けるかもしれないという予想からの緊張感や不安感をもった。

浜谷（2013）は、こういった「勝ち負けに捕らわれる子ども」は、自分をそのまま出せないでいるのだという。他者の評価を気にして安心できない。「認められたいのに認められない」それゆえ逸脱した行動をとるのである。[6)]

Ｅ児の場合も、ゲームに参加できなかったのは、「人に認められない（負ける）」からであった。今回は、保育者が、ゲームに参加するが、勝ち負けに関係ない、どんぐりを渡す係としてＥ児を配置した。その結果、保育者、他児と一緒に遊びを楽しむことができた。Ｂ児は、役割を与えられ、その役をこなすことで認められることができたと感じている。

保育者の考えた『どんぐりを渡す係り』という役割が与えられたことで、「勝ち負けに捕らわれる」Ｅ児にとって、「勝ち負け」、「緊張感」や「不安感」がない、安心できるあそびが展開でき、友達との関係が保てた。今回の保育者の援助から、子どもにとって安心の中での「自尊感情」を得られたのではないかと考えられた。

（５）Ｆ児（男児）　４歳児（2013.10月生まれ）

１）子どもの実態

① 生育歴：父・母：30歳代（共に会社員）兄（７歳）妹（２歳）母親が主に育児。
乳児期：健康、栄養（母乳）、離乳完了（12か月）首が座る（３ヶ月）生歯（６か月）はいはい（６か月）人見知り（10か月）歩行（12か月）片言発語（24か月）。

② 食事：咀嚼力が弱く炭水化物以外は、喉を通らないのか口の中にためてしまうため飲み込みにくい。歯で噛むより吸って飲み込む。スプーンを使うことが多く、握り持ちの状態。偏食あり。

③ 排泄：促せばトイレに行くことができる。便通毎日１回。

④ 睡眠：夜９時～朝７時まで　寝つきは良い。添い寝。

⑤ 清潔：手洗いは促すと洗うときもある。

⑥　着脱：靴の左右や衣服の前後の理解が難しい。シャツが出ていることが多く、自分で入れにくい。

⑦　家庭での人とのかかわり：母・父・兄・妹

⑧　言葉：発音が不明瞭、・ことばだけの指示は理解が難しく、実物や写真、手本などの視覚的な支援を見ることで伝わりやすい。・語彙数が増えてきたが、発音に不明瞭さがある為、内容が子どもには伝わりにくい。

⑨　運動：雲梯や鉄棒にチャレンジしようとする姿が出てきたが持続は難しい。左右の腕を振り、足を開き、肘や膝もあまり曲げずに走るくせがある。筋力と体幹の育ちも弱く、バランスも良くない為、短時間で疲れてしまう。

⑩　あそび：好きな玩具（人形・積み木・ブロック）

⑪　保育所での対人関係、社会性、コミュニケーション：友達のしていることに興味を示すことは少なく、自分の好きなあそびをする。人の名前を覚えることが苦手で、クラスの友達大半の名前がわからない。

⑫　発達検査（遠城寺式・乳幼児分析的発達検査）実施日2017年10月20日

ⅰ暦年齢４：８　ⅱ移動運動２：６　ⅲ手の運動１：２　ⅳ基本的生活習慣１：０

ⅴ対人関係１：２　ⅵ発語１：４　ⅶ言語理解１：６

２）Ｆ児のエピソード（４月当初～11月２日）〈オバケは怖い、でもおどかすあそびはやりたい〉

Ｆ児は、入園してきた４月当初、自分の思いを伝えたり、考えたこと、自分の身に起きたりしたことを、言葉で伝えることがほとんどなかった。入所後半年ほどたった頃、言葉が出始めた。しかし、発音が不明瞭で、やりたいことを保育者が子どもの様子をみながらやりたいあそびを理解していくことが多かった。また、時々、一緒に入園した妹の姿を追いそばに行くと安心する様子をみせていた。

６月になると、Ｆ児からオウム返しがでてきた。保育者は、やり取りが続くように間をもって子どもの言葉を聞くようにした。部屋から出ていくこともなく、妹を追っていくこともなくなった。言葉数が増え、二語文・三語文と自分の思いを伝えられるようにもなり、簡単なことばでのコミュニケーションもとれるようになった。担当保育者と信頼関係ができてきたのか、保育者が子どものやりたいことがその様子から理解できるようになったことで、Ｆ児は保育者と一緒にあそびを楽しめるようになった。

10月13日　クラスでイスとりゲームをした。初めてのことだったためか、「つかれた」と言い、あそびに参加したくないことをアピールした。あそびから外れ、保育者と２人でいると、「Ｆは先生とブロックする」と自分から保育者としたいあそびを伝えてくるようになった。

10月31日　友達がハロウィーンのおばけのお面を製作していた。製作する前に、オバケの絵本を見せてオバケについて知らせていた。　Ｆ児は、オバケが怖かったようで、お面を作るのも、お面をかぶってハロウィーンあそびをすることも嫌がっていた。しかし、他児から脅かされるのを怖がったため、脅かすのはどうかと考え、保育者と一緒に、子どもたちを脅かすオバケの役をやってみる

ことにした。すると、それが楽しかったようで「Ｆもおばけ作る」と保育者に言ってきた。その時クラスの中では、次の活動に移っていたが、Ｆ児の意欲が見られたので材料を用意し、お面を製作することにした。顔の形は自分で描きはさみも不器用ながら自分ですると意欲的であった。そのうち、のりが必要であることに気づき、「のり、いるよね。取ってくる」と自分で製作を進めることができるようになってきた。

11月２日朝、「おはよう」と朝は必ず保育者と挨拶を交わすことが日課である。保育室に先に入っていたＦ児が保育者の姿を見つけ「おはよう。先生、お休みしていたの、先生に会いたい（会いたかった）。」と抱きついてきた。前日、私（保育者）が休んでいたことが寂しかったと伝えに来た。

３）考察

６月になると、Ｆ児からオウム返しがでてきた。それを鍵に、保育者は、やり取りが続くように間をもって言葉を聞くようにした。そこから、言葉数が増え、二語文・三語文と自分の思いを伝えられるようにもなり、簡単な言葉でのコミュニケーションもとれるようになった。子どもにとって、保育者が不明瞭な言葉にも理解を示し、子どもの気持ちをうけとって接する援助をしたことで、Ｆ児に「安心感」がもてたことから、さらに自分の思いを伝える（言葉）での「自己表出」が起こってきたことが見て取れた。また、クラスが自分の「安心する場」となってきたことから、部屋から出ていくこともなく、妹を追って他の部屋に行くこともなくなった。

クラスでのイスとりゲームをした際、Ｆ児が「つかれた」とあそびに参加したくないことを表現したのは、「勝ち負け」を気にして「不安」になり、自分をそのまま出せないためことからの行動であると見て取れた。また、Ｆ児は、ハロウィーンのお面づくりに「不安感」や「緊張感」がない、安心できるあそびが展開でき、友達との関係が保てた。今回の保育者の援助から、子どもにとって安心の中での「自尊感情」を得られたのではないかと考えられた。

担当保育者との関係の深まりには、保育者が、やり取りが続くように間をもって言葉を聞くようにしたことが重要であった。語彙がはっきりしないからと、聞き逃してしまうと、保育者に受け入れられる安心感が得られない。子どもが保育者に受け入れられることが、子どもにとって、「他者の受容・承認」となったと考えられた。

（６）Ｇ児（女児）　５歳児（2012年２月生まれ）

１）子どもの実態

① 生育歴：父・母：30歳代（会社員）兄（11歳）母親が主に育児。
乳児期：健康、栄養（母乳）、離乳開始（５か月）首が座る（３ヶ月）生歯（６か月）
はいはい（８か月）人見知り（８か月）歩行（１歳１か月）片言発語（１歳）

② 既往歴等：肺炎のため入院

③ 食事：苦手なものがあると、食べるのをやめる。少しずつ挑戦するように「１つ食べる」「２つ食べる」と自分で食べる数を決めて食べられるときもある。

④　排泄：促せば自分でできる、便通（毎日２回）

⑤　睡眠：夜10時～朝７時まで　寝つき、寝起きは良い。添い寝。

⑥　清潔：手洗いは促すと洗う。

⑦　着脱：パンツ・ズボン・靴下・帽子を自分で着ることができる。

⑧　人とのかかわり：じゃんけんや勝敗の決まるゲームは負けることが悔しくて参加をしない。参加をしても負けてしまうと激しく泣ける。ルールのある遊びや集団遊びには抵抗があり、参加しても、途中で飽きてしまう。

⑨　運動：興味のあることに対して意欲的に取り組む姿があり、雲梯やのぼり棒、フラフープに挑戦する。難しいことは保育者に助けを求める。

⑩　言葉：保育者の話を終わりまで座って聞いていることが難しく、保育者にもたれかかったり、寝転んだりする。

⑪　あそび：ひらがなの読み書きはできないが、自分の名前をひらがなで書くことができる。

⑫　発達検査（遠城寺式・乳幼児分析的発達検査）実施日2017年10月20日

ⅰ暦年齢５：10　ⅱ移動運動３：８　ⅲ手の運動３：０　ⅳ基本的生活習慣２：３

ⅴ対人関係１：３　ⅵ発語１：０　ⅶ言語理解１：０

⑬　その他：　自我が強くなってきた分、自分の思うようにならないと怒ったり、その場でうずくまったりする。静かにして話を聞くという理解が難しく、大きな声で話すことがある。クラス全体への指示では理解しにくく、個別に対応しないと「分からない」と保育者に助けを求める。

２）Ｇ児のエピソード（11月６日）〈食べる量の見通しができ加減を保育者に伝えられる〉

給食時、保育者が子どもたちのおかずを配膳していた。Ａ保育所では、子どもたちが無理なく完食できるように、子ども自身でその日食べる量を決められるシステムにしている。日々のメニューの変化によって、食べる量がちがうからである。子どもがテーブルの上におかずが並べてあるため、自分で取りにくる。配膳が終わった際に子どもたちに、「いただきますのあいさつをする前に減らすことを保育者に言ってきてね。」と伝えた。すると、Ｇ児もおかずを取りにきた。以前までは保育者から促されて食事の量を減らしてきた。しかし、この日、Ｇ児は自分から保育者に「少しにして」と伝えてきた。苦手な食べ物がメニューにあったためであった。その日から、自分で量を決めて事前に盛り付け加減を保育者に言えるようになった。食べる量を自分で決めるようになると、１度盛り付けた分を途中で減らすことがなくなった。

保育者は、Ｇ児が、これまでの生活の積み重ねや、周りの子どもの様子姿を見て学び、自分で適量を伝えることができるようになったのではないか、また、食べきれる量が自分でわかるため、給食を完食するようになったと考えた。食事の量を自分で決め、食事を完食した時は多いに褒め、子どもの満足感や達成感、自信につながるように関わっている。

3）考察

Ｇ児は、今までは保育者から促されて食事の量を減らしてきた。ところが、この日は、自分から保育者に給食の配膳の量を「少しにして」と伝えてきた。苦手な食べ物がメニューにあったためであったためでもあったが、自分で適量を伝えることができたのは、自身で食べる量の見通しができるようになったことでもあると考えられた。

保育者のＧ児の行動の変化についてのよみ取り、①これまでの生活の積み重ね、②周りの子どもの様子姿を見て学んだこと、③食べきれる量が自分でわかるため給食を完食するようになったのではないかとの考えは的確であり、そのための食事の量を自分で決め、食事を完食した時は多いに褒め、子どもの満足感や達成感や自信につながるような関わり方も子どもの姿にあっていると見て取れた。

Ⅳ　総合考察

以上のように、6人の子どもたちは、保育者が仲立ちをすることで、保育者との関わりだけでなく、次第に特定の子どもには声をかけられるようになっている。さらに、仲間に対して自己表出し、安心できる活動の中で仲間関係に入っていこうとする姿がみられた。しかし、子どもが、仲間とつながる楽しさを味わうためには、他児の気持ちの理解をさせる援助が必要であることがわかった。

発達の遅れがみられる子どもの人間関係の形成に大切であった保育者の手立てとして、以下の点が重要であったと考えられる。

① 保育者は、安心できる子どもが自己表出できる環境と、周りの子どもたちがＢ児に興味をもってきていることを加味して、簡単な方法での他児の関わりの糸口をみつけることが必要である。

　特定の子どもに声をかけることができるようになり、仲間ともやり取りに興味をもつ姿がみられる子どもでも、気持ちを表出はできるが、他者理解や、自己コントロールはまだ弱い発達段階の場合があることを理解する必要がある。

② 他者の受容や自己コントロールができる段階まで発達していない子どもが、簡単なルールでもがまんすることは難しい。保育者は、子どもの発達を理解した子どもへの対応が重要である。

　例えば、散歩にいく際に、好きな子どもと手をつなぎたいと思っても、希望の子どもと手をつなげるとは限らない。散歩時のルールがまだ理解できていない場合、その活動の見通しがもてないこともあって、子どもは不安になる。保育者の、子どもに見通しを持たせる援助が大切になる。

③ 保育者は、時間をかけ、子どもの高ぶる気持ちが落ち着くのを待ち、気持ちをクールダウンさせることが、子どもにとって重要となる。

　子どもが、他児に叱られ大泣きした。保育者は、子どもの気持ちを落ち着かせた後、仲間

に入りたいと思うのであれば、仲間がどんな思いでこの場にいるか、したいと思うことは、他児に受け入れられる行動なのかなど、他者の気持ちが理解できるようになる援助を行うことが大切である。

④　子どもは、「勝ち・負け」や「できる・できない」の評価がある活動が、安心できない状態になる場合がある。自尊心をもたせるためにも、勝ち負けに関係しない遊びを考えていく必要がある。

　子どもがゲームに参加した際、勝ち負けに関係ない、どんぐりを渡す係として配置した。その結果、子どもは、保育者や他児と一緒に遊びを楽しむことができた。役割を与えられ、その役をこなすことで認められたと感じることができた。

⑤　保育者は、語彙があいまいな子どもでも、やり取りが続くように、間をもって言葉を聞くことが重要になる。

　間を持った援助から、子どもが、部屋から出ていくこともなくなった。また、言葉数が増え、二語文・三語文と自分の思いを伝えられるようにもなり、簡単なことばでのコミュニケーションもとれるようになった。保育者自身が子どものやりたいことが子どものその時の様子から読み取れるようになったことで、子どもは、保育者との遊びを楽しめるようになった。

⑥　保育者は、達成感を味わわせるための注意点として、①褒める内容がその場にあっているかどうか、②子どもがほめてもらいたい内容がどうか、についても検討する必要がある。

　例えば、子どもが、経験から、見通して食事の量を決められるようになったことや、自分で保育者におかずの量を減らすお願いができたこと、給食を完食するようになったなど、様々に変化がみられた。それらを褒める場合は、子どもが自尊感情を感じられる関わりになっているかどうかが重要になる。

保育者たちが、子どもの人間関係につながる事例として選んだものは、仲間へ入るために、躓きやすい部分、「他児たちの気持ちの理解」であった。また、その援助の難しさを感じていることもわかった。

今回は、発達の遅れがみられる子どもの個別の事例から、集団保育で人間関係の形成、とくに、自信、自己調整、自尊感情を検討したが、この支援方法については、さらに分析を深めるために、長期に渡っての実践分析を行なっていく必要があると考えている。

《　引用・参考文献　》

1）「特別支援対象児が在籍するクラスがインクルーシブになる過程―排除する子どもと集団の変容に着目して」、浜谷直人他著、『保育学研究第51巻第３号』、45－56、2013
2）保育所保育指針　厚生労働省告示大117号2017（平成29）年3月32日／2018（平成30）年４月１日施行　第2章　保育の内容　イ人間関係、株式会社わかば社
3）「人間関係に困難を抱える幼児の異年齢保育における支援（1)」、山本理絵・藤井貴子著、『宮城教育大学紀要49,』205-220,2014
4）「人間関係に困難を抱える幼児の異年齢保育における支援（2)」、山本理絵・松川玲子著、『愛知県立大学福祉学部論文集（64)』111-120,2015
5）「人間関係に困難を抱える幼児の異年齢保育における支援（3)」、山本理絵・松川玲子・近藤みえ子著、『愛知県

立大学福祉学部論文集（65)』63-78,2016
6）『自己肯定感が育つ保育 - 安心のなかで挑戦する子どもたち - 』浜谷直人編著、かもがわ出版、2013
7）「障害・虐待をかかえた子どもへの保育実践とその保護者に対する支援」、永田恵実子・佐々木光郎著、『平成27年度　静岡英和学院大学　静岡英和学院大学短期大学部紀要第14号』、109-126、2016
7）「保育内容「人間関係」の指導法に関する一考察 - 幼児期の人間関係の形成に着目した事例の検討を通して - 」、岸正寿・戸田大樹・荒木由紀子著、『創価大学教育学論集』、第69号、109-127、2017
8）「遊びの協同性を促す実践的視座」、佐藤哲也、田井敦子、畑中ルミ、赤城公子著、『宮城教育大学紀要第49号』、205-220、2015
9）「4歳児の『協働的経験』を支える保育者の役割について―4歳児クラスにおける１年間の取り組みから―」、小林美沙子著、『次世代教員養成センター研究紀要第１巻』、91-99、2015